

令和三年度 文学部 日本・中国文学科 学校推薦型選抜 小論文②

〔注意〕

- 1 机上に受験票を提示しておくこと。
- 2 監督者の指示があるまで、この冊子を開いてはいけない。
- 3 この冊子は、問題用紙（四頁）および解答用紙（二枚）からなっている。
- 4 この冊子のうち、落丁・乱丁及び印刷不鮮明な箇所があれば、手をあげて申し出ること。
- 5 解答は必ず別紙の解答用紙の指定された箇所縦書きで記入すること。
- 6 解答用紙に受験番号・氏名を必ず記入すること。
- 7 句読点やカッコ、数字はそれぞれ一字として数える。
- 8 満点は二〇〇点である。ただし、二五〇点に換算する。
- 9 問題冊子と下書き用紙は、持ち帰ること。

次の文章は『十訓抄』からの引用である。Aは教訓を述べた部分であり、B・CはAにつづいて列挙される説話のうちの二話を抜き出したものである。これを読んで、Aの教訓とB・Cの説話の具体的な内容とを関連付けながら、全体の趣旨を要約し、それに対する自分の意見を記せ。解答は解答用紙の範囲（七〇〇字）内に記すこと。（100点）

A

ある人いはく、人は慮りなく、いふまじきことを口疾くいひ出し、人の短きをそしり、したることを難じ、隠すことを顯し、恥ぢがましきことをただす、これらすべて、あるまじきわざなり。われはなにとなくいひ散らして、思ひもいれざるほどに、いはるる人、思ひつめて、いきどほり深くなりぬれば、はからざるに、恥をもあたへられ、身果つるほどの大事にも及ぶなり。笑みの中の剣は、さらでだにもおそるべきものぞかし。心得ぬことを悪しざまに難じつれば、かへりて身の不覚あらはるるものなり。

おほかた、口軽き者になりたれば、「それがしに、そのことな聞かせそ」などいひて、人に心をおかれ、隔てらるる、くちをしかるべし。また、人のつつむことの、おのづからもれ聞えたるにつけても、「かれ離れじ」など疑はれむ、面目なかるべし。

しかれば、かたがた人の上をつつむべし。多言とどむべきなり。

B

文範民部卿、余慶僧正を「貴き僧とて、人の妻めをするよ」といひてけり。僧正、このよし聞きて、たちまちに民部卿のもとへ渡られにけり。民部卿、その心を得て、所勞のよしをいひて、あはざりければ、僧正、「なほ大事なること、おのづから聞えむ」とありければ、出でざりけるほどに、「しからば、投げ出せ」と、加持せられければ、屏風の上より投げ出して、まどひくるめきける時、僧正、「さこそ」とて帰られけり。

文範は三日ばかり死にたるやうにて、悩み臥したりけり。これによりて、子ども引き具して、二子を僧正に奉りて、命生けけり。

公任卿の家にて、三月尽じゆんの夜、人々集めて、「暮れぬる春を惜しむ心」の歌をよみけるに、長能、

心憂き年にもあるかな二十日あまり九日といふに春の暮れぬる

大納言、うち聞きて、思ひもあへず、「春は三十日やはある」といはれたりけるを聞きて、長能、披講をも聞きはず出でにけり。

さて、またの年、病をして、限りなりと聞きて、人を遣はしたれば、「悦びて承り候ひぬ。この病、去年三月尽の日、『春は三十日やはある』と仰せられ候ひにし、心憂きことかな、と承りしが、病となりて、そののち、物くはれ侍らざりしより、かくなりて侍るなり」と申して、さてその日、失せにけり。大納言、ことのほかに歎かれける。

これは、「かくほどあるべし」とは思ひ給はざりけれども、さばかり思はむともしらず、なにとなく、口疾く難ぜられたりける、いと不便なりしか。

(注) ○笑みの中の剣……穏やかな微笑の裏に害心を抱いていた李義府の故事による。 ○「かれ離れじ」……「あの人以外には考えられない、あの人のはわざいに違いない」。 ○文範民部卿……藤原文範。 ○余慶僧正……天台宗の高僧。すぐれた験力で知られた。 ○人の妻をする……他人の妻と密通する。 ○加持……密教の呪法によって行う祈禱。 ○まどひくるめきける……錯乱状態になる。 ○公任卿……藤原公任。 ○三月尽……三月末日。 ○長能……藤原長能。歌人。 ○二十日あまり……三月が小の月に当たり二十九日までしかないことによる。 ○大納言……公任のこと。 ○三十日やはある……春が三十日ということがあろうか(三か月あるはずだ)。 ○披講……歌会の席で歌を読み上げること。

二

次の文章を読んで、本文の内容を要約した上で、この一文に託して筆者が主張したかったことを述べ、それに対する自分の意見を記せ。解答は解答用紙の範囲（七〇〇字）内に記すこと。（100点）

乘^ル騎^ニ者^ハ皆^シ賤^シ驪^ヲ而^シ貴^ス馬^ヲ。夫^レ煦^カ之^ニ以^テ恩^ヲ、任^セ其^ノ然^{スルニ}而^シ不^レ然^セ、迫^{ルニ}之^ニ以^テ威^ヲ。
 使^{ムレバ}之^ヲ然^セ、而^シ不^レ得^ル不^レ然^セ者^ハ、世^ノ之^ノ所^レ謂^フ賤^{シキ}者^也。煦^ク之^ニ以^テ恩^ヲ、任^セ其^ノ然^{スルニ}而^シ不^レ然^セ、
 然^{シテ}、迫^{ルニ}之^ニ以^テ威^ヲ使^{ムレバ}之^ヲ然^セ而^シ愈^{イよいよ}不^レ然^セ、行^ハ止^マ出^デ於^テ其^ノ心^{ヨリ}、而^シ堅^ク不^レ可^ク拔^ク者^ハ、
 世^ノ之^ノ所^レ謂^フ貴^キ者^也。然^{ラバ}則^チ馬^ハ賤^{シク}而^シ驪^ハ貴^シ矣。雖^モ然^{リト}、今^夫軼^ハ之^ヲ而^シ不^レ善^ク、
 榎^カ楚^{ソモテ}以^テ威^ヲ之^ヲ而^シ可^ク以^テ入^ル於^テ善^ニ者^ハ、非^ズ人^ニ耶。人^ハ豈^シ賤^{シカラン}於^テ驪^{ヨリモ}哉。然^{ラバ}則^チ驪^ノ之^ノ
 剛^{ガウ}復^{フク}自^ラ用^{ヒテ}、而^シ自^ラ以^テ為^ス不^レ屈^ト也。久^シ矣。嗚^呼、此^レ驪^ノ之^ノ所^レ以^テ賤^{シキ}於^テ馬^{ヨリカ}歟。

（劉大櫟「驪説」による）

(注) ○驟……らば。雌馬と雄の驢馬を交配した雑種。 ○煦……温かくする。情けをかける。 ○任其然……自発的に飼い主の意にしたがわせようとする事。 ○行止……行くことと止まること。振る舞い。 ○軼……逸に同じ。 ○榎楚……ひさぎといばら。それらの木で作ったむち。 ○剛復自用……強情で、自らの才能を頼みとして人に従わない。